

日本IT書紀

232 解題

12 補追 結

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二百三十二

解 題

一

序 叙

はじめに

〈序〉は「並び」「順番」「申し述べる」のほか「次第」「はじめ」の意、〈叙〉は「抒」「敍」に通じ「述べる」の意。総じて「ゆるゆると順を追って語る」。ないし「ありのままに述べ記す」。

二

溟 滓

ほのか／くくもりて

『日本書紀』卷第一「神代上」第二段「古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙」（古へ、天と地は未だ割れず、陰と陽は分れず、混沌として鷄子の如く、溟滓（ほのか）に牙を（きざし）含めり）。天地開闢の段。溟

はほのかで暗く、よく見えぬさま、滓は水の様子。ものの香などのこもったさま。上古の人びとは霧のかかった薄暗がりに神秘性、神性を見出していたことがわかる。

『古事記』は本文でなく太安万侶が上奏したときに添えたとされる「并序」に「夫混沌元既凝 氣象未効 無名無爲誰知其形然乾坤初分參神作造化之首」と記し、混沌とした宇宙が固まりはじめ天と地に分かれたとする。

契 機

きざむ

〈契〉は「しるしを付ける」の意、「機」は「はずみ」「きざし」。動的・過程的な状況下において次の発展を生み出すのに必須の段階・局面を言う。物ごとを始める手がかかり、きっかけ、動機のこと。

鷄 子

とりのこ

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙」。鷄の卵を溶き混ぜたとき黄身と白身が成すさまを渾沌に喩えた。

ほぼ同時期の成立とされる『古事記』（太安万侶、和銅四年）はその冒頭「天地初發之時、於高天原」で始めてい

て、最初から高天原が存在していたことになっている。

薄 靡

たなびく

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難」(その清陽(すみあき)らかなるは薄靡(たなび)きて天を爲し、重く濁れるは淹滯(つつ)いて地と爲るに及びて、精(くは)しく妙(たへ)なるが合へるは搏(むらが)り易く、重く濁れるが凝りたるは竭(かたま)り難し)。天地開闢のとき、鶏の卵を溶いたように混沌とした気が、渦を巻いて立ち上り、あるいは下方に沈んで、天と地を形作っていくさまを描いた。薄靡は夜明け間際、山の端にかかる薄雲が曙光を受けてかすかに茜色に染まるさま。

三

未 剖

いまだわかれず

『書紀』卷之一「神代上」第一段「古、天地未剖、陰陽不分、渾沌如鷄子、溟滓而含牙」。原始に天と地は暗い闇に覆われた液状の渾沌を成していたとする。

曙 光

あけぼの

〈曙〉は「あけぼの」、〈光〉は儿(児)と火で成り「小さなあかり」。夜明け間際、東の空にさすかすかな太陽の明かりのこと。物ごとの前途が開きはじめてたこと。

爨 黠

あいたい

〈爨〉は「雲がゆったりとたゆたう」さま、〈黠〉は「雲が重なり合う」さま。総じて「雲が重なりたゆたう」さまを指す。爨は二十五画、黠は二十三画で漢字二文字の熟語としては最も画数が多い。

游 魚

あそぶいを

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也」(開闢の初め、洲壤(くにつち)が浮き漂ふこと譬(たと)へば遊ぶ魚(いを)の水上に浮けるが猶(ごと)し)。天地開闢のとき土が浮漂していたとする形容。

四

合 牙

きざしふくめり

『日本書紀』卷第一「神代上」第二段「古、天地未剖、陰陽不分。渾沌如鷄子、溟滓而含牙」。牙は「芽」に通じ「きざし」の意。

乾 坤

けんこん

『日本書紀』卷之一「神代上」第三段「凡八神矣、乾坤之道相參而化、所以、成此男女」（凡（およ）そ八神は、乾坤の道が相參じて化（な）る、此て男女と成る所以（ゆえん）なり）。『古事記』上巻并序では「あめつち」と訓ませている。

八卦で乾は「天」であり「陽」、方位は「北西」、坤は「地」であり「陰」、方位は南西に配される。初生神三代のあとに誕生した四世代八神は、乾坤・陰陽・天地が相參して（入り混じって）誕生したので、男女一対なのである、という説明。

『書紀』『古事記』の神々は男女一対、かつ生と死を体

現しているだけでなく、お墓まで用意されている。「乾坤一擲」はすべてをかけて一度の賭けに出ること、のるかそるかの大勝負を意味する。

重 濁

おもくにござる

『日本書紀』卷第一「神代上」初段「及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地」（それ清陽（すみあき）らかなるものはたなびきて天と爲り、重く濁れるものは淹滯（つづ）ゐて地と爲るに及びて）。

天地開闢のとき重なり合った雲が棚引くような混沌が渦を巻き、透明で明るい気は立ち上って天となり、重く濁った気は下方に沈んで地となった、という。

修 羅

しゅら

『山家集』に「修羅よしなしな争ふことを楯にして瞋（いかり）をのみも結ぶ心は……」とある。仏教にいう十界の下位四番目で、妬み・誤解・裏切りなどによつて戦いや争いが絶えない世界。仏教・七部衆の一である戦闘の神・阿修羅に由来し、帝釈天と激闘した場合は「修羅場」と呼ばれる。

古墳や城を築く際、大きな石を運ぶ槿を「修羅」と呼ぶのは、大石を「たいしゃく」と読んで帝釈天にかけ、阿修羅がその帝釈天を動かしたからという。

五

淹 滞

つついて

『日本書紀』巻第一「神代上」第一段。「及其清陽者、薄靡而為天、重濁者、淹滞而為地」(それ清陽(すみあき)らかなるものはたなびきて天と為り。重く濁れるものは淹滞(つつ)ゐて地と為るに及びて)。淹滞は「水中に閉じ込めて身動きが取れないようにする」の意。転じて「とどこおる」。

焦 土

やけつち

『日本書紀』巻第一「神代上」第五段「伊弉冉尊、爲軻遇突智、所焦而終矣」(伊弉冉尊、軻遇突智(かぐつち)の為に焦け終に矣となる)。国産みの最後にイザナミが火の神「カグツチ」を産んで焼死した。

イザナギは怒ってカグツチを斬り、そこから水の神(閻

湍加美神、閻御津羽神)、甕の神(甕速日神)、山々の神(八神の山津見神)が派生したとするのは、人が火を自由に操ることができるようになって、金属と土器を得たことを示している。

地 定

ち・さだまる

『日本書紀』巻第一「神代上」第一段「精妙之合搏易、重濁之凝竭難、故天先成而地後定」(精しく妙なるが合へるはむらがり易く、重く濁れるが凝りたるはかたまり難し。故、天まず成りて地のちに定まる)。

「故天先成而地後定」は中国古典『淮南子』(天文訓)に依拠する。『書紀』は「地後定」としながら「便化爲神、號國常立尊」便(すなは)ち神に化為(な)る。國常立(くにのとこたち) 噂と號す)と、地上の神が最初に生まれたとする。対して『古事記』は「天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神」と記し、天地開闢のときすでに高天原が存在し、そこに初神「天之御中主」が誕生したとする。

滴 瀝

したたる

『日本書紀』卷第一「神代上」第四段「其矛銚滴瀝之潮、凝成一嶋、名之曰礮馭慮嶋」(其の矛銚より滴瀝し潮、凝りて一嶋と成る、之の名を礮馭慮(おのごろ)嶋と曰ふ)。海に突き刺した矛の先からぼたりと落ちた潮が最初の島となった。すなわちオノゴロ島である。

『古事記』大雀大王(仁徳)記に「淤能碁呂志摩」とあり、淡路島の南に浮かぶ沼島と比定する意見と、高松市屋島とする説がある。

六

揺 籃

ゆれる／ゆらぐ

〈揺〉は「ゆらぐ」、〈籃〉は竹かごのこと。総じて乳児を入れて揺りあやすかごを指す。転じて物ごとが生じて初期の成長・発展をとげる期間。

秉 炬

たひ

『日本書紀』卷第一「神代上」第五段「陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以為秉炬」(陰に湯津爪(ゆつつま)櫛を取りて、其の雄柱を牽き折きて秉炬とし)。湯津爪櫛は聖な

る櫛、雄柱は串の両端の大きな歯のことで『古事記』は「男柱」と表記する。その雄柱を引き抜いて灯りとした。

秉炬は「手に持つ火」、すなわち松明のこと。黄泉の国の伊奘冉尊を訪ねた伊奘諾尊が一目伊奘冉尊を見ようと暗闇の中でこっそり松明を点けたときの描写。

葦 牙

あしかび

『日本書紀』卷第一「神代上」第一段「于時、天地之中生一物。状如葦牙」(時に天地(あめつち)の中に一つ物生(あ)れり。かたち葦牙の如し)。

「牙」は先端が尖った三角推の形状をいい、これが動物の歯(牙)として定着した。ここでは稲の穂先(穎)のこと。天地開闢のはじめに葦の芽が誕生するのは、まず稲系植物を神格化したことを示している。

氣 噴

いふき

『日本書紀』卷第一「神代上」第六段「而吹棄氣噴之狭霧所生神、號曰田心姫、次湍津姫、次市杵嶋姫」(吹き棄(う)つる氣噴(いふき)の狭霧(さざり)に生まるる神、號(なづ)けて田心(たごり)姫、次に湍津(たぎつ)姫、

次に市杵嶋（いちきしま）姫と曰（まう）す。天照大神が素戔嗚尊の十握劍から三女神を生み出す描写。

息が生命を意味することから、それを劍に吹きかけ神を生む呪術的行為をいう。田心姫、湍津姫、市杵嶋姫は宗像三女神のことで、神社に祀られた最初の神々とされる。

七

明 彩

うるはし

『日本書紀』巻第一「神代上」第五段「此子、光華明彩、照徹於六合之内」（此の子、光華（ひかり）明彩（うるはし）くして、六合（くに）の内に照り徹る）。天照大神が生誕したときの描写で、「光華明彩」の四文字に華嚴経の影響を指摘する学説もある。

六合を「くに」と読むのは東西南北・天地の合わせた全宇宙。全世界の意味。

「六合」は『書紀』巻第三「神武天皇」紀「當足以恢弘大業・光宅天下、蓋六合之中心乎」「然後、兼六合以開都、掩八紘而爲宇、不亦可乎」とあって、『書紀』における建国定都譚においては畝傍山の山上から遠望した限り一帯が「國」、その東南の檜原が「國之埴區」（けだし國の埴區

（もなか中心）だった。

浮 寶

うくたから

『日本書紀』巻第一「神代上」第八段「韓郷之嶋、是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也」（韓（から）の郷の嶋には是金銀有り、若使（たとひ）吾が兒の所御（しら）す國に、浮寶あらずは、未だ佳（よ）からじ）。浮寶は舟のこと。

書紀は「一書に曰く」で素戔嗚（すさのう）は五十猛（いたける）神を率いて新羅国に降臨し、この国に舟がないのはよくないことだ、といって杉、檜、椴、櫟、樟などの木を植えたという。この伝承が史的事実を反映しているとすると、スサノオの一族は朝鮮半島から日本列島に渡来したことになる。

顕 見

うつしき

『日本書紀』巻第二「神代上」第八段「夫大己貴命、與少彦名命、戮力一心、經營天下。復為顕見蒼生及畜産、則定其療病之方」（夫れ大己貴命（おおむなちのみこと）と少彦名命、（すくなひこなのみこと）力をあはせ心を一に

して天下を経営（つく）る。また顕見蒼生（うつしきあを
ひとくさ）および畜産（けもの）の為は、その病を療むる
方（みち）を定む）。

顕見蒼生は大己貴すなわち大国主の命に従う民のこと。
国津神による国土平定伝承の部分。

周 流

めぐりあるく

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段「以岐神為郷導、
周流削平」（岐神（くなど）を以って郷（くに）の導きと
して、周流（めぐりある）きつつ削平（たひら）ぐ）。中
国古典『文選』上林賦「周流長途中宿」。周流は「長行し
紆余曲折」の意。

八

宜 試

ぎし／こころみたまへ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段「僉曰、天國玉之
子天稚彦、是壯士也。宜試之」（みな曰さく、天國玉の子
天稚彦、これ壯士なり。試みたまへ）。宜試は「宜しく試
みる」。天稚彦の読みは「アメワカヒコ」、若くて立派な男

子の意味。

先 驅

さきはらひ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第一「先
驅者還白、有一神、居天八達之懼」（先驅の者還りて白さ
く、一の神有りて、天八達之懼に居り）。天孫降臨のとき、
先驅けの者が天八達之懼（あめのやちまた）に一人の神が
いると報告した。

ヤチマタは道が多く集まり分岐する場所、すなわち都市。
八衢、八街とも。魏志倭人伝に見える「邪馬台国」はその
音を写したものとする説がある。

稜 威

いつ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第一「皇孫於
是、脱離天磐座、排分天八重雲、稜威道別道別而天降之也」
（皇孫ここに天の磐座（いはくら）を脱離（おしはな）ち、
天八重雲を排分〓おしわ〓けて、稜威の道別きに道（ち）
〓別（わ）きて天降ります）。地上を支配すべく高天原か
ら天孫が降臨していくときのさま、稜威は『書紀』卷第一
第五段に見える「湯津」に通じ、「神聖なるもの」の意。

覓 國

くさまぎ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第四「而簪空之空國、自頓丘覓國行去、到於吾田長屋笠狭之碕矣」(簪空(そしし)の空國(そらくに)を頓丘(ひたを)から覓國(くにま)ぎ行去(とほ)りて、吾田の長屋の笠狭の碕に到ります)。日向の襲の高千穂の峰に降り立つた天孫が「簪空の空國(荒れ果てて空しい地)を通り過ぎ、めぐりにめぐって吾田の長屋の笠狭の碕に到着した」という一文。

『書紀』本文中の注に「頓丘、此云毗陀烏。覓國、此云矩貳磨儀」(頓丘これをヒタヲ、覓國これをクニマギと云う)とある。「覓」は「住むのに適した地を探して歩き回ること」の意。

九

玉 鏡

たまのはり

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第二「于時、海神之女豊玉姫、手持玉鏡、来将汲水」(時に海神(わたつみ)の女豊玉姫、手に玉鏡(たまのはり)を持ちて来たり

て將に水を汲まんとす)。古くは西域に産した玉石を剝り貫いて作った碗のこと。訓「はり」は水晶のこと。

玉石は主に緑色透明度が高く、磨くと光沢が出た。なかでも中国大陸の王朝ではが好まれ、それが西域との交易路を開ききっかけになったとされる。日本列島に水稲耕作の技術を持った人々が渡来したのは、日本海の浜辺に産する翡翠の採取が目的だったかもしれない。

秀 起

さきたつ

『日本書紀』卷第二「神代下」第九段一書第六「其於秀起浪穂之上、起八尋殿、而手玉玲瓏、織經之少女者、是誰之子女耶」(かの秀起(さきた)つる浪穂の上に八尋殿を起てて手玉(ただま)も玲瓏(ゆら)に織經る少女はこれ誰が子女ぞ)。

手玉は「手首につけた玉石の飾り」、玲瓏は「玉のように輝き透き通ったさま」「玉が触れ合ってたかなでる美しい音」。八尋殿(火瓊瓊杵(ほのになぎ)尊と木花開耶(このはなさくや)姫が新婚生活を送った大きな屋敷)で美しい音を立てて機を織っているのは誰の娘だ?

木花開耶姫は桜の精で、桜が咲くころになると水田の水の温度が田植えに適するようになることから、水稲耕作民

が神として祀った。

「玲瓏」は「玉のように美しいさま」

纏綿

むつまか

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第三「海神則以其子豊玉姫妻之。遂纏綿篤愛、已經三年」（海神、則ち其の子豊玉姫を以て妻せまつる。遂に纏綿（むつまか）に篤愛して已に三年に經りぬ）。

纏綿は「こまやかで親しみ愛しむさま」。

彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）が海の底の海神（わたつみ）の宮で豊玉姫と三年を過ごし、彦波瀲（ひこなぎさ）武（たけ）鷓鴣（うがや）草葺不合尊（ふきあえずのみこと）（神武天皇の父）が誕生する。この物語が「浦島太郎」の原型となった。

侍者

まかたち

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第三「時有豊玉姫侍者、持玉鏡當汲井水」（時に豊玉姫の侍者（まかたち）有りて、玉鏡（たまのはり）をもちて當に井の水を汲まむとするに）。侍者は「上の者の意のままに動く者」の

意。

海神の宮殿に迷い込んだ彦火火出見は虚空津日高（虚空彦・そらつひこ）と呼ばれるようになり、泉のほとりで豊玉姫と出会うことになる。

十

迅風

はやかせ

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第四「弟居濱而嘯之。時迅風忽起、兄則溺苦」（弟、濱に居しまして嘯（うそぶ）きたまふ。時に、迅風忽（たちま）ち起こりて、兄則ち溺れ苦む）。

弟（陸上の王・彦火火出見（ひこほほでみ）尊）が浜辺で呪文を唱えるとたちまち強風が吹き、兄（海人の王・火（ほ）闌（すそ）降（り）命）が乗った船が転覆して、兄王が溺れた、という描写。

火の神を産んだことで命を落としたイザナミの子孫の敬称に「火」が付せられるのは、五行思想の赤につながり農耕・医薬・火の神である炎帝が先祖とする漢帝室の思想が影響している。「火」（転じて「日」＝太陽）が大和王統の姓だった可能性を示唆している。

懊 惱

なやむ

『日本書紀』卷第二「神代上」第五段一書第四「且生火神軻遇突智之時、悶熱懊惱」(火神軻遇突智(かぐつち)を生まむとする時に、悶熱(あつか)ひ懊惱む)。ここでの懊惱は「思い悩む」ではなく「絶叫をあげて苦しむ」の意。

死に際してイザナミは鉞物の神(金山彦、金山姫)土の神(埴(はに)山(やま)姫)、水の神(罔象女(みずはのめ)神)を産み、ハニヤマ姫の孫が食物神(豊宇氣毘売)となる。

草 昧

くらし

『日本書紀』卷第三「神武即位前紀」第一段「是時、運屬鴻荒、時鍾草昧」(是の時に、運(よ)、鴻荒(あらし)に屬(したが)ひ、時、草昧(くらし)に鍾(あた)れり)。

鴻荒は「太古」、草昧は「モノの始めていまだ闇のとき」のこと。ともに中国古文書『文選』からの引用。

連 屬

れんぞく

『日本書紀』卷第二「神代下」第十段一書第四「汝久居海原。必有善術。願以救之。若活我者、吾生兒八十連屬、不離汝之垣邊、當爲俳優之民」(汝、久しく海原に居しき。必ず善き術有らむ。願はくは救ひたまへ。若し我を活けたまへらば、吾が生(の)兒の八十連屬に、汝の垣邊(かきとも)を離れずして、俳優(わざおき)の民たらむ)。海に溺れた兄が弟に救助を求めた言葉。「もし自分を助けてくれたら子々孫々お前の宮のそばを離れず仕えさせよう」。

連屬は「つながる」「関係する」の意。『漢書』成帝紀に「卒徒蒙辜・死者連屬・百姓罷極・天下匱竭」(兵務や労役に服する者罪はないのに死に瀕し、百姓は疲れ果て天下は苦しんでいる)とある。

十一

嚇 躍

かくやく

「嚇」は周囲が恐れるほどに勢いが盛んなさま。「おどす」「大声で叱る」の意。躍は「おどる」。勢いよく遮二無二前進するさま。飛ぶ鳥を落とす勢い。

飄掌

たひろかす

『日本書紀』卷第二「神代下」一書第四「至膝時則舉足。至股時則走廻。至腰時則捫腰。至腋時則置手於胸。至頸時則舉手飄掌」(膝に至る時は足を舉ぐ。股に至る時は走り廻る。腰に至る時は腰を捫(もち)ふ。腋に至る時は手を胸に置く。頸に至る時は手を舉げて飄掌(たひろか)す)。
飄掌の意味は「手のひらをひらひらさせる」さま。「捫」の意味は「なでる」「さする」だが、「捫ふ」の場合は「よじる」「ひねる」の意。

仙蹕

みさきはらひ

『日本書紀』卷第三「神日本磐余彦天皇」即位前紀「於是、火瓊瓊杵尊闢天關披雲路、駢仙蹕以戻止」(是に火瓊瓊杵(ほのににぎぎ)尊、天關(あまのいはくら)を闢(ひら)き雲路を披(おしわ)け、仙蹕(みさきはらひ)駢(ひ)ひて戻止(いた)ります)。

仙蹕は神聖なる者が通るとき先の先払いのこと。転じて七世紀に天皇の御幸を指す言葉として使われた。『懷風藻』に、伊與部連馬養(いよべノいまかい)が持統天皇にささ

げた歌「堯帝の仁智に叶い仙蹕山川を遊ぶ。豊嶺杵として極らず」がある。

恢弘

ひらきのぶ

『日本書紀』卷第三神武天皇即位前紀「彼地、必當足以恢弘大業光宅天下」(彼の地は、必ず以て大業を(あまつひつぎ)恢弘(ひらきの)べて、天の下に光宅るに足りぬべし)。

大業の本来の意味は文字通り「大きな事業」のこと。『書紀』編者がここに採用したのは、あるいは隋・煬帝の年号「大業」に由来するか。「光宅天下」は中国の『尚書』序文からの流用だが、『日本書紀』編纂の直近事として、大皇帝国皇帝睿宗のとき、西暦六八四年九月から十二月の三か月だけ使われた元号「光宅」がある。

日本IT書紀 232 解題

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。